

第3回〈柴田南雄音楽評論賞〉奨励賞

2016年9月14日現在



新田 愛
NITTA Megumi

生年月日	1995年1月19日（満21歳）	
所属	愛知県立芸術大学音楽学部 音楽学コース4年	
学歴	2013年3月	静岡県立浜松北高等学校普通科（理系）卒業
その他	2014年8-9月	Langports English Language College（ブリスベン）にて語学研修
	2015年12月	長久手市国際交流協会第11回弁論大会で英語によるスピーチ（演題：“Japanese music culture: the importance of intercultural communications”.）
論文投稿数	1本	

研究内容

一昨年より旧ソ連の現代作曲家、アリフレート・シュニトケ Альфред Гарриевич Шнитке（1934-98）に興味を抱く。シュニトケのヴァイオリン・ソナタ第1番、第2番や交響曲第1番を分析していくうちに、シュニトケの作曲技法「多様式主義 полистилистика」成立の過程に関心を寄せるようになり、その背景にあると言われてきた映画音楽の調査を始める。映画音楽と「多様式主義」のコンサート・ピースとの間に見られる技法的・美学的共通点から、「多様式主義」成立に映画音楽の作曲が密接に関わっているのではないかという考えを抱くようになった。その仮定の下、現在はシュニトケの「多様式主義」確立の過程を、前衛的アニメーター、アンドレイ・フルジャノフスキー Андрей Юрьевич Хржановский（1939-）との共同作品から考察しようと試みている。

柴田南雄に関して

シュニトケの「多様式主義」はポストモダニズムに深く根ざすものであり、それは西洋の文化を「追いつけ、追い越せ」的に受容してきたソ連の状況を背景としていると私は考えている。以前より、そのような環境は近代以降の日本と非常に似ているのではないかと感じていた。いわゆる括弧つきの「西洋音楽後進国」であるこの2つの国が、少なからず共通する美学的素地を持ち合わせているのではないか、またそれは「西洋音楽後進国」のアイデンティティたるものではないかとの思いから、西洋の伝統を受容した近代日本を体現する柴田南雄の音楽に見られるポストモダニズム性にも興味を抱くようになった。